



[海の状況 (6/21~7/20)]

- ・ 神子表面水温……期間の始めの数日を除き、はなはだ高め（過去30年平均より1.5~2.0℃程度高め）で推移していた。（図1）。
- ・ 米ノ表面水温……期間をとおしてはなはだ高め（過去10年平均より1.5~2.0℃程度高め）で推移していた（図2）。

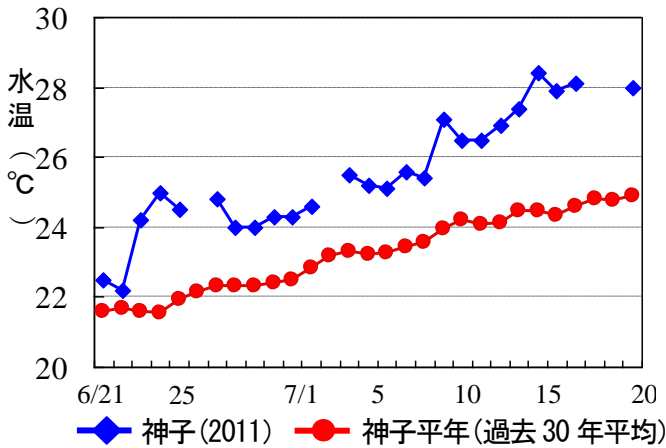


図1. 若狭町神子地先における表面水温の推移

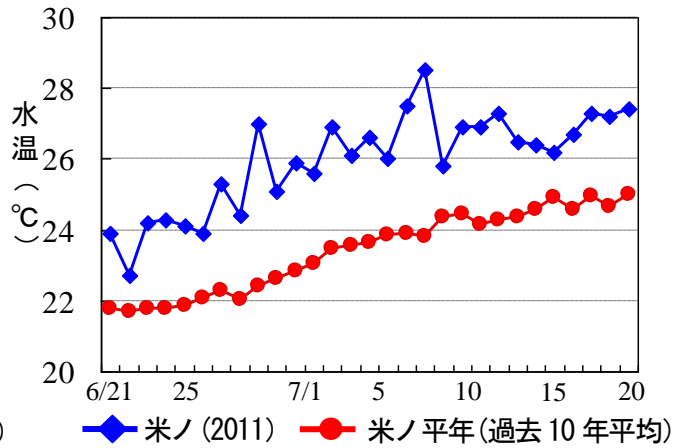


図2. 越前町米ノ地先における表面水温の推移

- ・ 100m 深水温・・・若狭湾沿岸域には16℃台の水域が広がっていた(図3)。

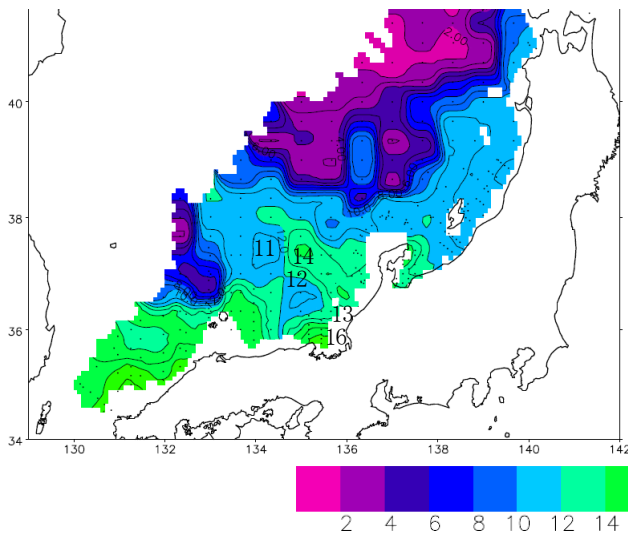


図3. 2011年7月上旬の100m 深水温

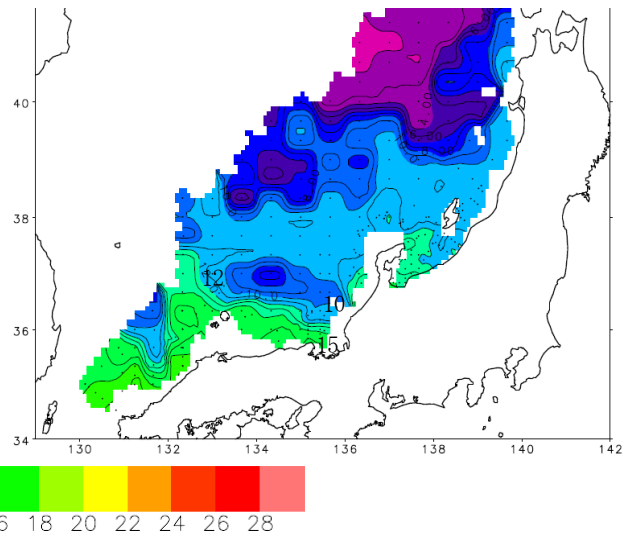


図4. 2010年7月上旬の100m 深水温

資料：日本海区水産研究所ホームページ発表の日本海漁場海況速報

平成23年度 日本海海況予報

日本海区水産研究所が平成23年7月~9月までの日本海海況予報を発表しましたので、関係部分を紹介します（本予報は、日本海区水産研究所のホームページ(<http://jsnfi.fra.affrc.go.jp/>)の最新情報の中に掲載されています）。

- 隠岐諸島北東の暖水域は、東に移動して弱体化するでしょう。
- 山陰・若狭湾沖冷水域の張り出しは、やや弱めで経過するでしょう。
- 対馬暖流域の表面水温は、やや低め~平年並みで経過するでしょう。
- 対馬暖流域の50m深水温は、日本海西部および北部とも平年並みで経過するでしょう。

〔漁の様相〕

2011年6月の県内の総水揚量は1422tで、2010年同月を351t下回った。ワラサ（2011年；38 t、2010年；20 t 以下同じ）、サワラ（101t、72t）、トビウオ（182t、66t）、アカエビ（99t、30t）等は上回ったものの、マアジ（203t、287t）、サバ類（23t、80t）スルメイカ（258t、330t）等は下回った。

漁業種類別の状況

定置網 ……全体で前年を341t下回った。ワラサ、サワラ、トビウオ等が上回ったが、アジ・小アジ、サバ類、ブリ・ハマチ・ツバスが下回った。

底びき網 ……全体で前年を73 t 上回った。マダイ、ハタハタ等が下回ったが、アカエビが上回った。

釣り・他 ……全体で前年を82t下回った。マダイ、アマダイ、メバル類等が上回ったが、スルメイカ、ケンサキイカ、タコ類等が下回った。

〔県内主要漁業の6月の漁獲量〕

(単位：kg)

定置網			
魚種	2011年	2010年	01-10平均
カタクチイワシ	3,871	4,944	14,986
アジ類	222,045	353,793	474,210
（マアジ）	202,637	286,591	273,346
（小アジ）	15,811	62,903	193,947
サバ類	23,288	80,011	43,310
ブリ類	249,091	572,587	174,114
（ブリ）	82,858	95,634	35,517
（ワラサ）	37,623	18,983	25,430
（ハマチ）	50,657	111,131	61,660
（ツバス）	77,953	346,839	51,360
サワラ	100,630	72,498	52,055
トビウオ	181,087	65,591	181,475
マダイ	19,639	12,376	12,675
スズキ	4,641	7,508	5,773
カマス	4,968	5,070	8,277
フグ類	24,488	3,429	18,047
スルメイカ	12,342	3,626	12,734
アオリイカ	454	711	1,378
ケンサキイカ	5,927	22,896	20,604
合計	888,444	1,229,906	1,086,753

底びき網のつづき			
魚種	2011年	2010年	01-10平均
その他エビ	9,570	1,871	2,952
合計	120,024	47,274	47,811

釣り、延縄、さし網、その他			
魚種	2011年	2010年	01-10平均
アジ類	743	985	741
サバ類	13	6	68
ブリ類	2,359	2,234	4,165
（ブリ）	66	71	239
（ワラサ）	550	1,279	463
（ハマチ）	1,403	841	3,345
（ツバス）	340	42	118
トビウオ	923	424	556
マダイ	3,527	2,733	4,483
キダイ	7,202	5,809	3,972
アマダイ	6,262	5,367	5,910
スズキ	6,638	8,571	6,249
ヒラメ	3,369	2,933	3,415
その他カレイ	2,779	2,822	4,632
カマス	100	284	158
アナゴ	2,326	2,066	4,733
メバル類	5,469	3,898	4,316
スルメイカ	245,502	326,305	236,139
アオリイカ	357	532	1,071
ケンサキイカ	1,501	4,519	5,141
コウイカ	965	460	790
タコ類	35,677	37,067	40,138
合計	413,920	496,041	435,891

※01-10平均はまき網を含む

総計	2011年	2010年	01-10平均
	1,503,089	1,756,051	1,583,020

※“()”は銘柄別の漁獲量

※”その他カレイ”はアカガレイ以外のカレイ類

※”その他エビ”はアカエビ以外のエビ類

〔近府県の漁様相〕

(漁獲状況…石川県；6月中旬～7月上旬までの定置網の1日あたり漁獲量。京都府；6月中旬の舞鶴漁連へ水揚げされた定置網の1日あたりの漁獲量。兵庫県；6月下旬～7月中旬の余部定置網の1日あたりの漁獲量。鳥取県；6月下旬～7月中旬の1統あたりの漁獲量。)

石川県 …定置網…マアジ11.2t、ハマチ7.0t、トビウオ4.5t、マサバ2.0t。

京都府 …定置網…カタクチイワシ13.3t、マアジ10.7t、トビウオ3.6t、ハマチ・ツバス700kg。

兵庫県 …定置網…アジ288kg、トビウオ207kg、ケンサキイカ149kg、ツバス13kg。

鳥取県 …まき網…マアジ8.4t、マイワシ7.3t、ウルメイワシ5.7t、マサバ2.6t。

(鮎川 航太)

急潮のお話

平成23年5月29日に台風2号が鹿児島県の南側に接近し、熱帯低気圧に変わった後も日本列島の太平洋側を通過して行きました。この熱帯低気圧の通過により、福井県沿岸にも急潮が発生し、多数の定置網に甚大な被害を及ぼしました。今回、被害にあわれた定置網漁業者の皆様につきましては、破損した網の修理や、新調を余儀なくされるなど多くのご苦勞があったことと心中ご察いたします。

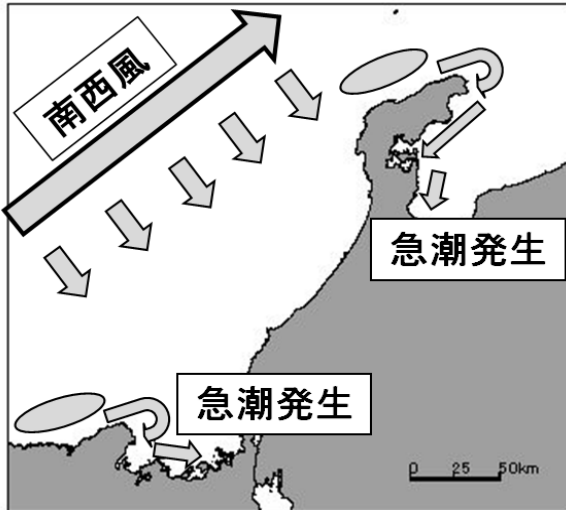


図1. 急潮発生原理

この定置網に被害を与える急潮というものは、どのように発生するのでしょうか、図1. をもとに簡単に原理をご説明します。まず、若狭湾沖を台風などの低気圧が通過する際に、南西風が吹きます。この南西風が一定期間以上吹き続けると、南東向きの流れが発生し沖の海水が沿岸に寄せられます。沿岸に寄せられた海水の影響で、沿岸域の海面が盛り上がり、行き場を失った海水が逃げ道を探すように岸に沿って北上します。この北上する流れが、定置網など沿岸域に設置してある網に被害を与えるわけです。

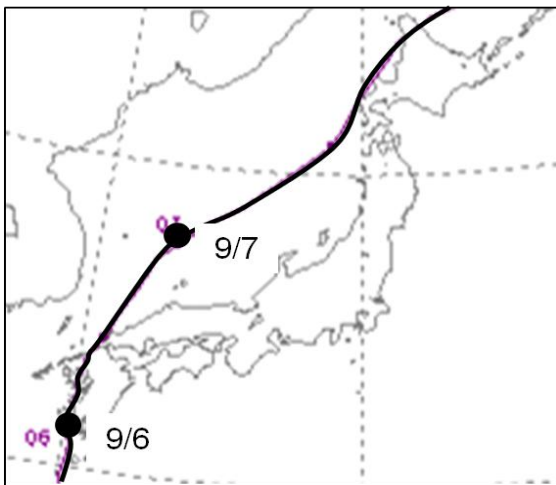


図2. 平成17年台風14号経路 (気象庁)

これまでの聞き取り調査や観測結果をみると、日本海側における急潮の多くは、前述したように若狭湾沖を低気圧が通過し、南西風が吹いた時に発生することが分かってきました。図2. に示す平成17年台風14号の通過により発生した急潮は、県内の定置網に被害を及ぼしました。

しかし、今年の5月末に発生した急潮の時は、図3. のとおり熱帯低気圧が太平洋側を通過し、福井県沿岸では北東風が吹きました。今回のようなケースで急潮が発生したことは、過去にまったくなかったわけではありません。しかし、福井県が急潮の調査を始めてから、このケースの急潮でこれほどの被害が出たのは初めてでした。

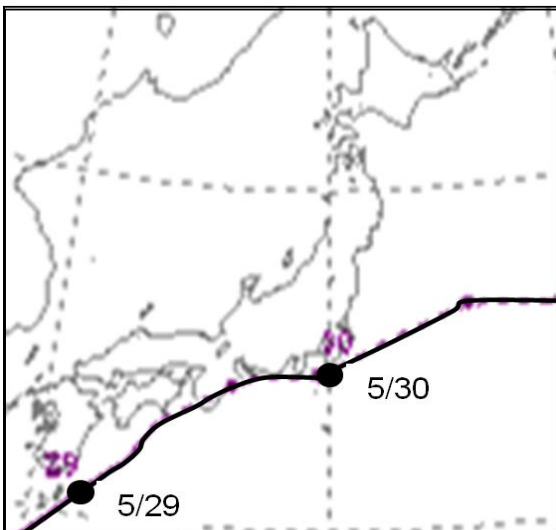


図3. 平成23年台風2号経路図 (気象庁)

現在、水産試験場では定置網漁業者の皆様のご協力を得て、定置網に流速計等の観測機器を設置させていただいています。今後、今回の急潮発生時の観測データが得られる予定です。観測データの解析を行うことで、今回の急潮発生時の状況が分かります。急潮による被害を出来る限り防ぐためにも、福井県における急潮の発生要因の解明に努めていきたいと思っています。

(鮎川 航太)

平成23年度スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海側の各試験研究機関によるスルメイカ漁場一斉調査が、6月下旬から7月上旬にかけて行われましたので、その結果についてお知らせします。

(1) 福井県の調査結果

福井県沖合の4定点において、釣り機3~6台を用いて毎晩8時間ずつ釣獲試験を行いました。

- 漁場水温・釣獲海域の表面水温は20.7~22.7℃(2010年; 23.5~25.3℃)、50m深水温は13.6~16.3℃(同; 11.4~14.7℃)でした。
- 釣獲結果・総釣獲尾数は、1933尾(2010年; 3,122尾)、CPUE(釣り機1台1時間あたりの釣獲尾数)は2.9~36尾、平均14尾でした。
- 体長組成・釣獲されたイカの胴長(外套背長)は、7月4日及び7日の操業においては15~17cmの個体が主体で、5日及び6日の操業においては20~22cmの個体が主体でした。

月日	7月4日	5日	6日	7日
調査位置	N36° 20' E135° 00'	N38° 00' E135° 02'	N37° 41' E135° 38'	N37° 05' E136° 18'
釣獲尾数	138	411	1151	233
CPUE	2.9	8.6	36	9.1
平均胴長 (cm)	17.2	20.9	19.9	16.0
表面水温 (°C)	21.8	20.7	21.7	22.7
50m深水温 (°C)	14.4	14.0	13.6	16.3
標識放流尾数 (尾)	—	—	455	—
標識番号 (黄色アンカー型タグ)	JPN A00/A01/ A02/A03/A04			

(2) 日本海全体の状況

日本海区水産研究所の取りまとめによると、全調査定点におけるCPUEの平均は16.59尾で、昨年(14.59尾)の114%、近年平均(16.17尾)の103%の水準でした。秋田県~石川県沖(北部日本海)では能登半島付近でCPUEが20~50尾の分布密度が高い調査点がありましたが、福井県~長崎県(西部日本海)ではCPUEが5~20尾の調査点が多く見られました。沖合域では大和堆付近で分布密度が高い調査定点が複数みられましたが、昨年よりも大型個体の比率が低くなっていました。

5月の西部日本海の漁獲量は近年平均並みで、6月は昨年及び近年平均を下回りました。

今後の水揚げ量の見通しは、西部日本海は10月以降に沖合から南下する群が漁獲の主対象となるようです。今期の漁況は日本海への来遊尾数が昨年及び近年平均よりも多かったことから昨年以上回り、近年平均並みと予想されます。沖合域においては、8月には大和堆付近では昨年及び近年平均を下回るでしょう。本州北部日本海においては、活発な漁場が形成されることはないようです。

本調査では、各機関により標識放流が行われました。標識の付いたスルメイカが採捕されましたら、水産試験場までお手数ですがご連絡ください。

(高垣 守、宮田 克士)

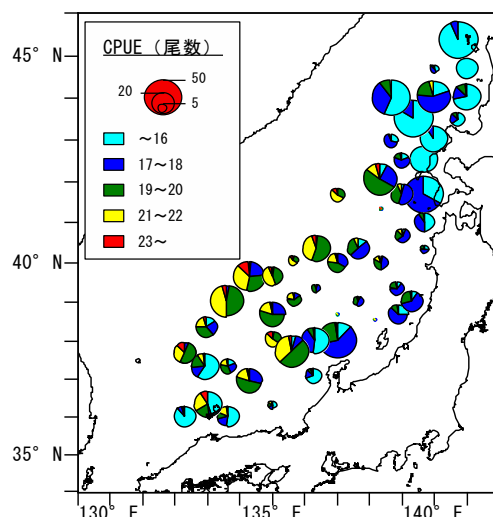


図1. 日本海におけるスルメイカの分布状況